開催地名	愛媛県宇和島市
開催日時	令和７年 12 月 15 日（月）　09:30　～　11:30
開催場所	岩松公民館
語り部	太田　千尋（宮城県仙台市）
参加者	岩松小学校/下灘小学校/清満小学校/御槙小学校/畑地小学校/北灘小学校 103 名
開催経緯	これまで学校や地域で防災のための学習を行ってきた。地震や津波のメカニズム、ハザードマップの見方や避難経路の確認などを頭で理解し、体で訓練してきた。しかし、今回の学習は知識の確認ではない。いつ、どこで私たちが被災者となってもおかしくない状況だ。私たちに今必要なのは「生きた証言」だ。これらは教科書やニュースだけでは決して伝わらない。被災された方々の真実を子供たちに伝えてほしい。講話を聴き、自分事として考えてほしい。
内容	「3.11 東日本大震災を経験して」 （１）東日本大震災当時の状況と教訓 　東日本大震災から来年の 3 月 11 日で 15 年の月日を迎えるが、当時私は消防署に勤めておりました。地震は約 6 分間という非常に長い時間揺れが続き、建物内の書類や本棚がすべて落ちるほどの激しい揺れでしたが、消防署内は意外なほどに静かなものでした。消防署員は日頃の訓練により、揺れている最中も次にすべきことが決まっており、理解しているため、パニックにならず冷静に行動していました。震災時にパニックにならず冷静に行動することは非常に難しいことですが、小学生は大人よりも素早く机の下に隠れるなど身を守る行動ができるため、今後訓練で経験を積んで、その成果を大人に見せてリードしてあげてほしい。 （２）津波の恐ろしさと避難することの重要性 当時の荒浜小学校において、当初の計画で荒浜小学校の生徒たちは、4 キロメートル先の小学校へ避難する予定でしたが、低学年の子たちには、その非常事態に急いでの移動は困難と判断した校長が、校舎の上階に留まるという判断を下し、実際に学校に留まった全員が助かりました。逆に、津波警報が発令され、学校へ迎えに来た保護者と一緒に帰った子どもたちは、残念ながら津波の犠牲になってしまった。消防隊員として現地で生存者の捜索を担いましたが、子供たちの遺体を見ることは非常に残酷なものであり、とても辛いものでした。この経験からもわかるように、学校にいる時に津波警報が出たら学校や先生の指示に従い、勝手な行動をしないことが重要である。この一連の震災の経験を通して、今この荒浜小学校では津波の防災学習を学ぶ場となっており、5 年生になると仙台市内の小学生たちはみんなここで学習をすることになっている。

	また、他の地域でも助かった人の多くは、一度避難しても「まだこの場所は安全じゃないかも。危ないのでは？」と考え、さらに高く、より遠くへ避難を繰り返しており、一度の避難で安心せず、二度逃げ、三度逃げを続けて、より安全な場所を目指して避難する姿勢が重要である。 （３）被災後の生活と備え・地域での助け合い 　震災後には過酷な避難所生活が待っているわけであるが、当時はガソリンや灯油、電気、水道もすべてがシャットダウンしてしまい生活は極めて困難であった。ガソリンスタンドには長蛇の列ができ、給油制限もありました。飲料水や生活用水が何ヶ月も使えなくなることになるので、普段から非常食も含めて十分に備えることが重要であり、古いものから使い新しいものを補充する「ローリングストック」を行い、常に新しいものを常備して備える「自助」が非常に重要である。 他にも、避難所において親族以外の方たちとも生活を共にするので、お互いを助け合う「共助」も重要である。 また、避難所では中学生や小学生が食料の配布を手伝ったり、断水したマンションの階段をリレー形式で水を運んだりと、若い力が非常に大きな戦力になるのでコミュニティを支えることとなる。 （４）まとめ 　今後、南海トラフや首都直下型地震が数十年のうちに起こるといわれている中、震災で家族や大切な人を失ってからでは遅いので、今から備えるということをしてほしい。常日頃から家族の人たちと避難場所の確認や、どこへ逃げるのか、どうやって逃げるのかなどを確認し合いながら、来たる震災に備えることをしてほしい。

開催地より	東日本大震災発生当時の現地や避難時の様子、避難所での生活状況など貴重な話を聞くことができた。津波への対策に目が行きがちだが、地震の揺れへの対策（シェイクアウトなど）が第一になることを理解し、その後の津波からはまず避難するということを確実に周知しておく必要性を改めて感じた。地震や津波から逃げることができたあと、在宅または避難所等で確実に生き延びるために日頃からの備えを十分にしておくことも、体験談を聞くことでよりはっきりと意識することができた。